

おおやしまのくに
大八洲国、国盗り異聞

(崇神天皇ハツクニシラススメラミコト編)

第一章 三韓編

(一) 夫余族の王の末裔、依羅(イニエ)

倭国大乱す。聖徳太子の十七条の憲法にもあるように『和をもって貴しとす』が信条であり、何事も話し合いで決め事をしてきた黎明期の九州に、かつてない争いが勃発した。聖徳太子の時代を遡ること三百余年、三世紀の中頃のことである。

邪馬台国を中心とする朝鮮半島や北九州の倭族と、もともとの住人で倭族の移住によりどんどん南九州方面に追いやられていた南方系民族の国(インドネシア、フィリピン系を少し含み、台湾、呉あたりの人々が中心) 狗奴国と、が激しい戦いを繰り返している。この狗奴国はおそらく熊襲の国であり、熊襲とは今の熊本県の球磨地方の球磨と阿蘇とを続けて『クマアソ』が『クマソ』と約めて呼んだ呼び名とも思われる。狗奴国の呼び方はクマ国だったかも知れない)

邪馬台国は北方系(大陸系) 倭族の国である伊都国や末羅国や奴国などと南方系民族の国である狗奴国などの真ん中に位置していたため、そんな国々の共存のための議長国的意味合いから、二世紀の終わり頃に神憑りの強かった邪馬台国のシャーマン(巫女) 卑弥呼がそれらの国々から女王として共立された。しかしこの頃はすでに北方系倭族の流入が非常に多く、だんだんと、いろんな取り決めは習慣の違いの多い南方系民族の狗奴国に不利に進められるようになってきていたのだ。そのことに不満を抱き続けてきた狗奴国がついに反旗を翻してこの戦いが始まった。

しかし、邪馬台国を中心とする連合軍はいくつもの国の集まりなので、考えのまとまりがなく苦戦続きだった。

卑弥呼は西暦二四七年に帯方郡に援軍を求めたが、魏の使いの来るのを待たずして六十年以上維持していた女王の座を、そのカリスマ性の衰えとともに追われ、弾劾のすえ、殺されてしまった。ただし、この頃の倭人たちはことのほか崇りを恐れていて、その墓は崇りを鎮めるためにも壮大なものを造った。奴婢などの生きてままだ埋められた殉葬者も百人以上にのぼった。

次に男王が立った。しかし連合国は服さず、内紛により千人以上が死亡した。それで一族の中から卑弥呼の跡継ぎの巫女で、まだ十三歳の耆与がたてられたが、以前のような求心力はもうこのときの邪馬台国にはなかった。

耆与は魏の国に毎年のように保護を求めて貢物をした。

その甲斐もなく、九州は長く続く戦乱によりかなり疲弊した。邪馬台国もかつての力は残っていないかった。

そのような時代(二世紀の終わりごろであろうか)に依羅(イニエ)は朝鮮半島の弁韓

の中なかの加羅からの地の、辰韓とのちょうど境目あたりの海に面した、今の釜山ぶさんに近い片田舎に生まれた。

両親はその頃はもうかなり落ちぶれていて、細々と狩りをして生活を営んでいたが、かつては、今の中国東北部で勢力を持っていた夫余族の王族の末裔であった。その証として、家には家宝の神鏡『八咫鏡やたのかがみ』とかつて魏の国から伝えられた孫子の兵法を記した竹簡『孫子』が誰の目にも触れないところに大切に保管してあった。

彼は幼い頃から一つ上の兄、波豆羅はづらとともに両親を手伝い、十歳になる頃には弓矢のかなりの使い手になっていた。

父親は大毘々おおびび、母親は伊香いかがといった。父親のしつけはとても厳しかったのだが、兄はおとなしく頑張り屋だったので一生懸命父親のいいつけを守っていたが、依羅いり(イニエ)はなんで自分たちがこんなに厳しく育てられるのかが分からず、いつも父親に不満を抱いていた。(彼は韓人からは依羅、倭人からはイニエと呼ばれていたが、ここではイニエと呼ぶことにする。)

そのぶん母親はふたりにとても優しくかった。イニエが不満そうな顔をしてふてくされているいつも母親がやさしく何も言わないで抱きしめてくれた。

仕事の手伝いが済んだあとなどは、ふつう、村の子供たちは楽しく遊んでいた。イニエと波豆羅はそんなときに家でいろんなことを学ばされるのだ。

イニエは隙を見ていつも家からぬけだして従兄弟の才彦や倭人の子供らと遊んだ。一方、父親の大毘々にとつて、今の生活はまさに屈辱的で耐えられないものであったのだ。

大毘々が子供の頃は南夫余族の皇太子としていずれ国王の地位が約束されていた。住んでいたところは今の中国東北部の大平原だった。高句麗の王家とも姻戚関係にあった。

ところが馬韓ばしこくの月支国げつしこくと呼ばれた国の辰王の先代王の時代に大毘々の父王とちよつとした勢力争いがあり、大毘々側が負けてしまったのだ。

父王は殺されて、親族も離散、家臣が大毘々を連れ、今住んでいるところに命からがら落ち延びて来たのだった。

それ以来、大毘々の家は衰退の一途をたどった。それは自分が王になる前であったのだが、自分の時代になって、もう王というにはあまりにもかけはなれた状態になってしまっていたのだ。しかも大毘々には王としての力量もなかった。

イニエの家には、数少ない財産のうちの一つであるのだが、馬が一頭いた。

大毘々がまだ若い頃には忠臣が五、六人と馬が十頭ばかりいたのだが、王妃であった大毘々の母親がある夜、神のお告げを聞いた。それは、「家臣をこのままにしておけば、二度と再びこの家が栄えることはない。しかもこの苦しい生活がずっと続くから、家臣には暇を出し、自由に解放してやるがよい。そうすれば、やがてこの家にも光がさす。」

というものだった。王妃はこのお告げを信じ、家臣をみんな自由にすることにしたのだ。中には涙ながらに仕えていたいと言う者もあったが、王妃は諭すようになけなしの財産である馬を一頭ずつ家臣に与え、元のようになら呼び戻すことを告げ、毅然とした態度で暇を出した。

しかしながら氣丈だった老王妃が生きているうちには一条の光もさすことはなかった。この王妃も今は亡くなり、馬は生活のために徐々に売つたり、年老いて死んだりして最後に子馬が一頭のみ残つたのだが、この一頭残つた馬も、もう相当な年齢に達していた。

このような事情の中で大毘々は自分の力量では御家の再興はむずかしいことが判つていたので、かつては自暴自棄になっていたので。そこにふたりの男の子が次々に生まれて、なんとかそこに希望の光を見出し、それにしがみつこうようになったのだ。そのせいでどうしてもむすこの教育に力はいってしまふのだつた。

大毘々はイニエと波豆羅に御家再興の願いを託し、密かに騎馬民族としての恥ずかしくない武術を身につけさせたかつたのだ。

大毘々はイニエが十二歳になつたころから馬の乗りこなし方を教えはじめた。イニエは学問などの習い事は好かなかつたが、馬に乗つたり、武術を習つたりするのはとても性に合つていた。だからこちらの稽古は自ら進んで行なつた。外での習い事はイニエのたまつた鬱憤の発散の場になつていた。

兄の波豆羅も努力してはいたが、この頃にはもうすでに体格も運動神経も弟には一歩も二歩も引けをとるようになっていた。しかし学問の習得に関しては、かなり兄の波豆羅が上であつた。波豆羅は頭がよかつた。

乗馬が少し上達したある日、イニエは遠乗りにてしてみた。そして野山を駆け巡つていときだつた。木のこずえと浅い茂みの間から、少しむこうにこんこんと湧いて出る湧き水を見つけたのだ。ちようどのどが乾いていたイニエは身をかめながらおもいつきりその茂みを飛び越えるつもりだつたのだが、身のかめ方がたりなかつたのか、馬が高く飛びすぎたのか、横に大きく張り出していた木の枝にいやというほど頭を打ち付けて、地面に叩き落されてしまった。そしてその場に氣を失つて倒れこんだ。

どれくらい経つたであらうか。

意識が戻つたイニエが目をあけた。どうやら薄暗い土間にむしろが敷かれていて、その上に寝かされているのがわかつた。

あわてて起き上がるうとして身体を横にしたとき、ずきつと腰に痛みが走つた。と同時に頭が、がんがんするほどの痛みに襲われた。ひぎとひじ、それに右頬と額がひりひり痛んだ。

すり傷があちこちにあった。しかしその傷には薬草が貼り付けてあった。止血、化膿止め作用のある薬草であろう。小さい時、母にもこうしてもらったことが思い出された。身体には泥とかは全くついていなかった。だれかが身体を拭いてくれたようだ。のがからからに乾いていた。

薄暗い中に人影が三つ動いていた。

「おお、ようやく気付いたようだの。おまえさんは茂みのところで気を失っていたのじゃよ。まだ動くのは無理みたいじゃのう。」

にっこりと微笑み、話しかけてきた顔をよく見ると老婆だった。あとのふたりは女の子の姉妹のようであった。姉はイニエより少し年上であろうか、やせていて背が高かった。大人びて鼻筋の通ったすっきりした顔立ちだった。

妹はまだ幼さの残る愛らしい顔立ちで、体全体がふっくらとしていた。

「^{おぢな} 嫗（おばあさん）、ここはどこじゃ？」
イニエはたずねた。

どうやらここはイニエのみつけた湧き水の近くらしい。

後でわかったことだが、この家の住人は老婆と孫娘ふたりで、ぼろ小屋を建て、ひえ、あわなどを栽培して生計を立てていた。ただこの老婆は薬草の知識が豊富で、野草の毒による幻覚作用や、解毒、熱さまし、また、整腸剤としての薬になる草などのことも詳しく、ときには孫娘の姉のほうが、薬草と食料を交換しに近くの村に出掛けて行っていたようだ。

村では薬を待っている者が多かった。だから孫娘が薬を持って出掛けると、帰ってくるときはいつもかなりの食料を持って帰ってきていたので、食べるものには不自由はしなかったらしい。

イニエは次に馬のことを尋ねたが、イニエの倒れていたところには馬はいなかったらしい。

悔やんでもしかたがなかった。イニエは頼んだ。

「水が飲みたいのだが。」

「おお、そうかそうか、今飲ませてやる。ヲバシ、水を汲んできておくれ。」
ヲバシと呼ばれた娘はすぐに水をもってきた。

「すまぬ。」

とイニエは言ったが、手を出してすぐに飲むことはできなかった。身体がいうことをきかなかつたのだ。そこでヲバシが水を飲ませてくれた。

一気にイニエは飲み干した。

水がイニエの五体に染み渡るように感じられた。生気がよみがえってくるようだった。すると今度は腹が減ってきた。

イニエは食べ物を頼んだ。

微熱があつたらしく老婆は解熱と腫れの退く薬草の入つたおかゆのようなものを食べさせてくれた。それを食べたら急に眠気が襲つてきた。どうやら眠気を催す成分が含まれていたであろう。イニエは深い眠りに落ちた。

かなり時間がたつたと思われる頃、イニエは下半身に異様な感じを覚えて、目を覚ました。それは女の手だった。

はっとしてイニエは身体をこわばらせた。

夜目に慣れてくるとその姿がわかった。ヲバシだった。乳房ちぶさと女陰ほとをあらわにしてイニエに押し付けながらイニエの陰部をしきりに撫でていた。

イニエは小さいときから、おとなが性交まぐわいをしているところはよく見てきていた。その頃の性交はかなりおおらかで、草むらや家の中でも人目をあまり気にしないで行なわれていたのだ。興奮した女が奇声をあげるのも、なぜだかわからなかったが自分も興奮して聞いたものだった。ただしイニエはまだ経験はなかった。まだ十二歳（満年齢では十一歳）では仕方のないことだったろう。

ヲバシが求めている事がなにかはわかったが、どうしていいのかわからなかった。

ヲバシはイニエよりひとつ年上なだけだったがその経験はかなり豊富のようだった。

イニエはまだ経験がないことを言おうと、口を開こうとしたときヲバシはイニエの口をふさぐように口を重ねてきて小さくささやいた。

「静かに！ ぜんぶ吾がするままにまかせていいから。」